續日原 上

元禄元年

東洋文庫

東京文庫

福

めと称六とを元の向の国を訓給ひ
根代寿とといふ名おりし、後の源
のほ義おりほ者く心のこ
と学を合さく東あ野の内ね行
武道都の行より別さ拾さ人を
尝ちくさも神も者よ心ゆとな
ア年ね辛きうちの元さ内ま

[illegible]

[illegible]

一摺形不下

一番　左　芹　持

手ごとに[illegible]　右　拳白

[illegible]　コ齋

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

二番

左　鞠　持

白雪をくくりて　[illegible]　勇招

右

[illegible]　松風

左詞書にて粉雪をさま
りはれば右折らく落花をさ
[illegible]
者の手柄を
[illegible]
[illegible]

三番

左　梅

[illegible]　松濤

右　勝

三日月は毒をいづる　不角

晴香浮動月黄昏

[illegible]

四番　左　五加　持

[illegible]　五加哉　峡水

右

[illegible]五加[illegible]　扇雪

左孤村[illegible]

右[illegible]

[illegible]

[illegible]持[illegible]

五番　左　蝶　勝

いけるかく捨[illegible]　胡蝶下　溪石

右

[illegible]　委秋

[illegible]

[illegible]

左[illegible]蝶

[illegible]

六番　左　鷺　持

落つる滝水のひびきも涼しく　一排

右　長月ばかりまを待ちかねて　心水

かりそめの夕べの月の雲もなくいとど風流

左　たのしみわすれ情

たのしみわすれ

七番　左　落花　勝

古井戸の落花ちる水の限　仙化

右

散ぬれば花ちる垣は落葉　雨聞

左　中ぬ七夕のたのまれ

こなりける夕べの月の水

ちるとてもあるの月情

なもみの所と得

ちるとは水くまいさら

ゆるくくやや

八番

左　柳　勝　琴風

右　[illegible]

九番

左　雲雀　勝　奥児

右　立些

祖生一着ノ鞭

拾番

左　赤丸　持

世の中に世をのがれて春の花　鹿房

右

ものりくいとくほうと春の花　紅林

左の方ほのぼのとなく

右　春の夜

十一番

左　赤ノ目　持

鶯鳴くく赤丸月と明月の詠ける　朱絃

右

春の飽て夏もてる春の月夜　鶴白

左の至りて詞まことにすす

左雖解きてとくく高保

右　不分明

十二番

左　櫻　持

櫻ちる春の山路を五月雨の　其角

右　櫻　不ト

さほ姫の傘さして山櫻　不ト

春雨の森の雫を生田川

ぬるゝことを

ぬれて笠を

吟じてとゝのを

左寒山詩の句不ト十分なれども

句の心を神妙に

狂句のくいを他の心行とかゝ

左寒山詩の句わかるやうに

うの風雅れなる

世を捨て人を

世を捨て人の句と

紙判りかくしとして人又いと

無判の判も判ものと丁卯之冬

素堂書

一番

左　持　卯むら

卯花や里のそこそこ朝朗　露沾

右

鶯の声やみしかきね卯の木　不卜

左ハ玉河の卯花人も卯むら風俗なるに
片里をとりて見せたらむ一枝瀟洒
出藩籬風をしきる貝おもしろしといひて聞
侍り右ハ此卯の花川所花も忽
ま鳴てし清氏の女のひとしくやは
さく句ひつまおハ擬議のよ
ひし

二番

左 持 表

村雨よ年降りもてる郭公　枳風

右

雖まだ馬さの表の蓮風　調押

表年の雨し年と降りもてる

郭公の雨かみ身を

右ハ所り蓮風とてもてる

所り意味をて又ハ

持ち

三番

左 勝 筍

垣根ちく竹のうへく厚く　金峯

右

古井戸の筆松に月の影　不諭

筍の折りぬ人ハ裏ちく

厚もんさう所まで住をて

古井戸の松本又住をて

多おもわつて

ちと左の金峯

所りて

四番　左　田植

蓬萊亀とゝくゝ千代田植　立竿

右　勝

折りかへ千代のくゝ色くゝ　兼言

勝母ゝ言葉の田井に打つて

とゝみて　打ちまて數

左り少一作ひたちわ行を

とゝ右の句の姿よ四やらわ

きもとゝ引きとゝ

五番　左　勝　百合草

吟殘と殿の内乃早百合下　一排

右

八月ゝ心ゝ　百合草　破笠

左の句馬さゝ心ゝ詠ゝ

草ゝ切ゝ

風情ゝ侍ゝ

大ゝ

内ゝ

左り乃百合草

六番　左　持　萬尾

萬尾とゝ[illegible]　扇雪

右　兩聞

蝶ひとつ[illegible]

古墳の萬尾よりへく典く

蝶ひとつ[illegible]

いつまとゝ[illegible]

[illegible]

七番　左　持　夕顔

夕顔や[illegible]　玄來

右　調義

[illegible]

八番

左 勝 牧遠

一節人情とまとまる 牧遠 二齋

右

[illegible] 溪石

[illegible]

九番

左 持 軒

閼伽棚 [illegible] 軒下 浜水

右

[illegible] 心水

[illegible]

十番

左　蓮

霄に駒てかけまくらとする　勇招

右　勝

色ゆまして水とのびさす蓮下　野馬

左の蓮は自雨しの霄の雲ゆ雲の

ちとせ雨白ゆ雲ゆ雲ゆ蓮葉の

蓮とつまいて れとものびさすもの

さてはいらくとけるの

作たまうとと東の

叶はいとわとと絵

十一番

左　勝　涼

舟とせくゆ雲ゆ雲ゆ雲ゆ　不角

右

ゆうのゆや雲ゆ雲ゆ雲ゆ　琴風

左は舟とと絵月

月着とと雲ゆ雲ゆ雲ゆの

ゆのゆくゆくゆくゆくゆくと文

ゆゆゆゆ　左文　禅さくゆ少ゆつゆ

ゆゆゆの祈して　ゆゆゆゆゆゆゆ

ゆゆゆゆゆゆゆゆの文字

ゆゆゆゆゆゆゆゆ左の絵涼

十二番

左 持 清水

掃除して新まる人の清水かな　風水

右

踏迦て又さへ底の清水かな　嵐水

左ハいかにも人の在所よ
気をつけさせられ句しかる
うら人のするゝ計りなり
わかれくもり鳥はしと
渇きものゝ何もあらて
いさぎよし
なを又さらりとしたるに
清水の参とまし
しかれ
けふは何く
いれ持と
書しを
調和

一番　左　勝　初秋

文月や閨と感ずる蚊屋の内　其角

右

秋風の心動きそめ　縄すだれ　嵐雪

左八琪樹西風枕簟秋とうたひ秋思人情
なるのうつりうつりて新涼ふるの風半夜
の竈裏ふるしきりに感ずるの字字字字字字字字
なるも其心月なるかなとかまて風ふるし
ひとと縄簾れ寂寥たる中凄切
として肌骨よ毎ゆて耳心をうたはし
書い秋の書新と行き人たる情を付
けるなり

二番　左　露

木鋏に落てかのほし竹の露　古川

右　勝

朝露に隠れて濟すや世さる木　雁書

兩句ともに露をよくひたりて
句持もすがりあり右野
るのは侍作なりて
一句千里風定
ありとても掛とは侍れど
左判者の筆しまひく
かとこそ

三番　左　勝　稲妻

稲妻に光さしのする電哉　大笑

右

稲妻のくさ侍りの合わり　不角

左稲妻のうつつさ覚に結びまく
さりの体といふ気つさよはまうが
中に包と打つゆるりん作意の
うの折の中まちてもかんすに
くありわりとハあれ命またり絶
たとこの床の方ふ東のうき宮もと
わ申といひけれさとまの思ふ
ゆゑく侍のとものに稲妻のとおひ
よのつゆふれは毎とハみをいし左ハ及かくやく

四番

左 萬

[illegible]

右 勝

蛇足

[illegible]

左 [illegible]

[illegible]

扇雪

五番

左 勝 鶏

[illegible]

琴風

[illegible]

右

[illegible]

左 [illegible]

沾荷

六番

左

駒下

勝

調拍子

右

三衆

以下欠丁ナリ